

五等分の花嫁 IF

フリードg

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もうそろそろ終わりそうで悲しい……。

とりあえず、体調もよくなりつつあるので、またまたまた浮気しちゃって書いちゃったのが五等分の花嫁。

幼少期からスタート、魅力的な5つ子達とオリっぽい男の子が登場する物語です m

〔 m

不定期ですが、ちよこちよこつと更新予定です m 〔 m

暖かい目で見守っちゃってください（・艸・）

4話 3話 2話 1話 0話

--	--	--	--	--

40 27 18 10 1

目次

0 話

『先生が言ってたんだけど、瓜を半分に切っても同じ形だから『瓜二つ』っていうらしいよ』

『瓜ってなに？』

『わかんない』

『食べ物だつて言ってた』

『それならメロンだつてそうじゃない？』

『メロン二つ』は変でしょ』

『だねー』

『うーん……』

いつも私達是一緒。いつも五人一緒。それが、私達だから。

瓜の話は正直どうでも良くて、重要なのはここからだ。

『どうしたの？ 四葉』

『瓜は5つに切っても同じ形なのかな、って』

『あははは。じゃあ私達は『瓜五つ』だね』

『……うんっ』

そっくりな事は自分達については褒め言葉だから。

皆一緒。喜びも、哀しみも、怒りも、慈しみも、全てが——五等分。

そうだと、思ってたんだけどなあ……。

「二乃と三玖！ みんな呼んできて！」

「皆、じゃなくて、一番は誰か大人の人！」

「2人とも落ち着いて！ あの子が心配なのは皆同じだから」

「そうっ！ わたし、ここで見てるから！ 落っこちちゃわない様に、頑張れって言い続けるから！」

今、見上げてるのは大きな大きな木の上。沢山枝分かれした枝の先に、プルプルと震えてる黒い猫がいた。高い所に上り過ぎて、降りる事が出来なくなっちゃったんだろ
う、って事は直ぐに判った。

今、一花と五月は先に帰ってていないのは3人だけ。でも自分達の身長より

ずっとずっと大きな木を前にしたら、何にも出来ない。何時、あの子が落ちちやうか判らない。

あそこから落ちちやったら、そのまま川に落ちちやうよ！

でも、わたしなら、行けるかもしれない。助けられるかもしれない。

以前サッカーの試合に出た時、監督が言っていた。一番うまくなってるって。体力も一番あるだろうって。正直へボ監督だったから、そんなに強く思ったりしなかつたけれど、ひよつとしたら自分なら、と今思ってしまう。だって、あの子を助けたいから。

「ちよつと四葉！ 危ない事、考えないでよ！ 直ぐに呼んでくるから」

「登ろうとかコト考えたらダメだからね！」

考えてる事がバレちやつたみたいだ。

自分が考えてる事なんて、簡単にバレちやう。他の皆も同じ。私だって解るから。

「わ、わかつてるよ！ 危ない事なんてしないから早くっ！」

「うん！ 三玖、いそごっ！」

「うん！」

2人は 思いっきり駆け出した。

この林道は結構長い。お散歩コースだから人がいない訳じゃないんだけど、今は運悪く誰もいなかった。大きな道路に出て誰かを呼ぶか、直ぐ傍の家に戻ってお巡りさんに電話した後、4人で駆けつけるか。

「何にしても、遅いかも……、だって、あの子……っ」

ぶるぶるぶる、と震えてる猫を見てそう感じてしまう。身体全体で震えてて、今にも落ちそうだから。しっかりと爪で枝につかまってるみたいだけれど、時折 ずるっ、と落ちちやいそうになってるから。

「まてない。まってるられないよっ……！ ……ごめんね、二乃、三玖。わたし、いくから！」

だから、私は決心した。

ちよつとでも身軽になれるようにカバンを下において、かぶつてた帽子も木に引っ掛けて、準備体操だけは忘れずに。

「……よしっ！ 絶対に助けるからね！」

さあ、登るぞ！ って構えてたら……頭に感触、あつたんだ。

それが帽子だつて気付くよりも早く、声が聞こえてきた。

——待ってろ。

そう一言だけ。

風のように現れたのは男の子だった。

するする、とあつと言う間に木に登っていく。落っこちたら危ないのに、怪我、大怪我しちゃう。それに川に落ちちゃったら……、って 何度も考えてたのに、その子に視線が釘付けになっちゃった。

「つ、と、ほっ……、よし」

まるでおサルさん。あつという間に猫ちゃんの所にたどり着いてた。

「馬鹿だな。無理して登って、イイことあったか？」

両手をハイ、と広げる。

そこに飛び込めば……解決！ 何だけど、猫ちゃんも状況が判らないみたい。怖いって気持ちだけが前面に出てて、ただただ震えてるだけだった。

それを判ったのか、男の子は前に出ていった。枝が細くなつてて、より危ないのにするすると。それで、猫ちゃんの所について。

「あつ、あぶないっつー！」

猫ちゃんは落ちそうになつちやつた。

助けてくれるんだという事が、猫ちゃんながら判つたんだと思う。だから、身体の力、抜いちやつたんだ。しっかりつかんでた枝も放しちやつて、そのまま下に……。

「つとと、あぶねっ。ほら、落ち着いて 落ち着いて。直ぐ降りるからな」

落ちなかつた。

男の子が猫をキヤツチしちやつたから。両足を枝に絡ませて……、まるで鉄棒でもしてる様にぐるんつ、とまわつて……、猫ちゃんを片手に、またするつ、するつ、と降りてきて……、私の前に。

「お前の猫か？ しっかり躡はしといた方が良くぞ」

「え、えっと、その…… わ、わたしのじゃなくて……」

「なんだ？ 違うのか。どっちでも良いか。ほら」

猫ちゃんは、地面に下ろされると、ぴゅつと走って行っちゃった。お礼くらい、って思ったけど、そういうものだよな。でも、最後にこつちを向いて、少しだけ頭を下げたんだ。まるでお礼をしているみたいで驚いた。

そんな時だ。少し強い風が吹いてきて……。

「あつ、わたしの帽子が……つ」

すっかりかぶってなかったから、帽子はふわりと浮いて、風に流されちゃった。それも川の方に。フェンスを越えそうになった所で、またあの男の子。

「よ、つと」

いつの間に、なんだろう。本当に凄いと思った。まるで風の子？ 風の精霊さん?? 色んな考えが頭の中にあつたよ。

「結構お前って、ドジなんだな。すっかりかぶってるよ。ここに落ちたら取れねーぞ」

「あ、うん…… そ、その ありがとう……」

「おう。じゃ、オレ行くから」

「ちよ、ちよと待って！ えっと、キミは……？」

「悪い。これからサッカーの試合があるんだ。時間がヤバいから、また今度な」

手を伸ばしたけど……掴めなかった。するつと抜けていつちやった。ほんとに風みたい。

暫く、私はぼーつとしてた。二乃や三玖、五月と一花が来て、皆が呼んでくれた大人たちも来て……それで猫ちゃんがどうなったのかを説明して、それでも私の中にはあの男の子の事だけでいっぱいだった。

「サッカー……か。あのへボ監督なら、あの男の子のこと、何かわかるかな？」

1話

明日になつても、そのまた明日になつても、あの風の様な男の子の事が忘れられなくなつちやつてた。

だから、皆を連れて……また、やつてきたんだ。あのサッカーをやつてる所に。

私達はいつも一緒にいなきやいけないから、皆で一緒に行く。……ちよつと 何だか複雑な気分だったけど、きつと気のせいだよ。

「おおつ！ よく来てくれた！ 本当にマジでよく来てくれた！ 今日も助つ人を頼む！ 連続してきてくれたつて事は、サッカー将来頑張るんだろうっ!?! 助つ人と言わず、今日から我がチームに入つてくれ！」

いつもの監督が大はしやぎしてた。そんなに前勝てた事が嬉しかったのかな？ とちよつとだけ思ったけど、今はわたしの中ではあの子の事しか考えれなかったんだ。

「助つ人参戦とは違うよー。ちよつと聞きたい事があつて来たの」

「四葉が来たといって言つてたから私達も一緒についてきたの」

「「うんうん」」

「ええ……。サッカーに興味持つてくれたんじゃないのか……。あんなに上手くなったのにも、もつたないぞ……。ああ、もつたないぞ……」

すつごくがっかりした様だけど、ごめんね、ほんとに今はサッカーよりも サッカーをやつてる、つて言つてたあの男の子の事しか考えられないんだ。その、お礼もまだ言えてないから。

「ま、それはもう良いか。それで聞きたい事つてなんだ？ おおつ!! ひよつとしてお母さんへの次のプレゼントの相談か!? 病気が治つたお祝いの次は、いつもありがとう、貴女をいつも見守つてます！ 的な!? よろしい、この私が相談に乗り、更に選んであげましょう」

「……ちよつと何を言つてるのかわからないです」

『……………』

聞きたい事 聞けないし、わたしを含めて皆も全然興味なさそうにしてた。真顔つていうのかな？

「うぐおおつ、わ、悪かった。悪かったから、5人でその顔するの止めてくれ……」

いつもの悪口より監督にとっては嫌だった見たい。……次も、この顔 やつてみよう

かな? って、早く聞かないと。

「聞きたい事は男の子の事なの」

「男の子?」

「ちよつと前に、えーつと ほら 前に助つ人に来た日、だったかな? この辺りで会つた子で……え、えーと うーんと」

色々聞いてみようにも、名前も知らないから、何をどう聞けば良いのかわからなくなつちやつた。とりあえず、思つた事を聞いてみることにしたよ。

「つまり、風のような男の子です!」

「へ?」

「あ、あとは おさるさんみたいに、木を登るのがじよーずな子です!」

色々と言うけど、頭に沢山《?》を造つちやつてるみたいだった。

「四葉く さすがにそれだけじゃわかんないんじゃない? だって、へボ監督だし」

「こ、こら、三玖! 大人だつて傷つくと言つた筈じゃないか。それに オレじゃなく たつて無理でしょ……? これだけじゃ」

「ブー」

「なぬ!?!」

「私は二乃でした」

「うごあああつ!! こんどはそうきたか!」

この間は、確か三玖がヘボ監督って言ってたんだ。確か。今日は二乃が言つて、やっぱり解んなかったみたい。やっぱり私達はそっくり!

「うーん……、でもそれいじょうどう言えば……どういえば良いかな……、どういえば……、ううーん……」

「ふむふむ 何の事なのか、さっぱりだが 今日の手は男女混合のチームなんだ、サツカーしてるっていうのなら、ひよつとしたら、相手側にいるかもしれないぞ?」

「えっ!? ほんと?」

「ああ。と言つても 向こう側も助つ人男子で一人しかないから、一発勝負だけど」

一瞬すつごく期待したんだけど……、やっぱり損しちゃった気分だったよ。仕返しされた、つて事かな? ……お母さんに言いつけたら、良いかな?

「一人だけつて、あのゴールキーパーしてる子だけ? おー なんか凄いや」

「え、どれどれ一花!」

「ほらあれ、あ、また止めた!」

五月と一花の視線をわたしは追いかけた。正直、期待なんかしてなかったんだ。

だって、たった1人だけ、
って言ってたし。男の子の
チームだって沢山あるの知
ってるから。

「あっ……………」

でも——。

「(アイツ、先週の猫のヤツだ)」

「おい、ゆうくん！ よそ見してないでパスパス！ こっちこっち！」

「おう」

「よっし、次も頼むねー！」

「そっちこそ頼むぞ みさと」

「おーけー！ まっかせといてー！」

思い切り投げたボールを上手く拾って走っていく みさとを見送った後 オレは視線をあの賑やかな所へと向けた。

さつきから向こうの監督は自分達のチームの事をみようともしない。そういうの、どうなんだ？ って思う。……だけど、今のオレには関係ないか。違うチームだし。

でも、あの賑やかな連中には見覚えがある。それで似た様な顔が5つもあつて驚いた。

「おおおー！ 中野姉妹が入ってきたら、こっちのものだよ！ 次こそ、決めてやるんだからね！」

「なかの姉妹？」

「ふふ〜ん。あの子達のこと！ あの子達が入ってきたときのうちの勝率凄いだからー！ 次こそゴール！ だもんね！ 皆が決めてくれるよ！」

「……そこは自分で決める、と言った方が良くない」

「うっ……、き、決めれるなら決めてるもんっ！ 何本も止めちやったのは、どこのドイツだよー！」

「ああ、それは ここのオレだ。コイツ……なかの っっていうのか。ああ、ひよつとして四葉って名前の子、いるのか？ あの中に」

「四葉？ 勿論！ エースストライカー！ この間なんか、ハットトリック決めたんだよー！」

「ふーん」

「反応がたんぱく……。むう、見てろよっ！ 謙遜してるけど、あの子たちほんと凄いだから！」

「凄いのにはわかった。楽しみにしとく。……でも、まずは、ボール取返しに行けっ。決められるぞ、みさとに」

「わあ！ まずっつ」

視線を戻すと もう敵陣奥深くまで入っていった。慌てて戻ってるけど、まあ多分無理かな。2点目入るだろう。

それはそれとして、あの姉妹たちの中に四葉って名のヤツがいるんなら、オレも少しだけ用がある。

「…………拾われたのがオレで良かったな。って、まだ決まった訳でもないか」

オレのポケットの中に、財布が入ってる。

その財布にあった名前が《なかの よつば》だったから。

2話

なんとビックリ!

なんてことでしょう!

「ほらあの子だよ! あの子の男の子っ!」

チームの中で たった1人だけの男の子が あの時の子だった。

「へえー、じゃあ四葉が気になる男の子って事だね」

「や、そ、そんなのじゃないよ一花。 えっと あの時、猫ちゃんを助けてくれたことのお礼が出来てなくたってさ!」

「ほんとにそれだけ?」

「そーだよ!」

何だか一花にからかわれてる様な気がするけど、気にしないもん!

でも、一花には要注意しないとって思う。

だって、直ぐにわたしのモノ持つて行っっちゃうから。おやつも、前にも集めてたシルも、横取りされちゃったし！

「わたし、お礼いいにいく！」

「ちよつとまつてよ、四葉。今試合中だよ？　終わつてからだつて」

「うー」

それもそうだった。試合中に乱入するなんて事しちやダメだよね。

「まあ！　四葉の探し人も見つかつて良かった良かった、と言う事で、試合に出てくれ！

サッカーで語り合えば良い！」

と言う事で、私達は試合に出る事になったんだ。

正直、今日が出るつもりは無かったんだけど、待つてるのも退屈だし。

この間も勝つ事が出来たし、上手くなつてゐるって　一応言ってくれたし、今日だつて

勝てるって思ってた。思ってたんだけど――。

ピピーーーーッッ!!

「3対0……、負けちゃった……」

「ホント、何あの子…… 沢山うったのに全然入らなかった」

「今回皆にシュートチャンスがあつたのにね。あんなに止められるなんて」

「サッカーにそこまで興味ある訳じゃないんだけど、ここまで完敗しちゃうのは悔しいな」

「四葉が風みたいな子って言ってた理由が分かったかも。動きが早い」

ボールを沢山カットして、シュートのチャンスも沢山あつた。

皆、2回か3回くらいシュート出来てたと思う。

でも、決まらなかった。

「四葉が一番惜しかったよね。後ほんの少しだけ下だったら、入ってたよ」

「うー、入らなかつたら一緒だよ……。それに 三玖だって惜しかったよ。」

の子、キャッチ出来てなかったから。それに五月や二乃、一花だって」

だってあ

「うん。私も、みんな最初は良い感じ、って思ってた。もうちよつとで決まるって。でも……」

多分、みんなおんなじ気持ちだと思う。五つ子だから解る、って訳じゃないよ。きつと他の人だつて感じると思う。

最初だけ。最初だけは良かったんだ。でも、回数を重ねていくと……。

「くあぁー、あつちにも天才がいたのか。完敗だ。次こそは負かしてやれ！」
「監督がへボだから負けちゃった……」

「監督の責任」

「うぐつ、今度は二乃と三玖……どっち？」

「両方に決まってるじゃん」

「ぐう……」

色々とビックリしたんだけど、それはまだまだ始まりに過ぎなかつた。どんどんビックリする事が増えていくから。

「お前が、四葉か？」

いつの間にか、あの子がわたしのすぐ後ろに来てた。

ビックリした。後ろにいた事もそうだけど、私達がいる中で……ピタリと言い当てた

から。

「え、なんで……??」

「あれ? 違うのか?」

「い、いや、そう! そうだよ!」

「ん。ほら、これ」

またまたビックリした。

ポケットから取り出したのは……見覚えのあるモノだったから。

「この財布、お前のじゃないか?」

そう、財布。

前にサッカーの試合をした日に無くしちゃった財布だった。

「あ……、拾ってくれてたんだ。ありがと。ほんと、ありがと……っ」

凄く嬉しかった。ずっと、気にしてたんだ。皆誰かの失敗も五分分って言うてくれて、一緒だつて言うてくれたんだけど、なくしちゃったのはわたしである事には変わらないから。

だから、嬉しかった。それとそれ以上に聞いてみたい事があったんだ。

「どうして、四葉だつてわかったの?? あ、因みに私は一花だよ」

「ん? あー……」

聞きたかった事、一花が私より先に聞いちゃってた。また、一花が先に……って思っちゃったけど、男の子がちよつと困った顔をした訳の方が気になった。

「私達も気になるね。びつくりした。あつ、私は五月」

「三玖」

「二乃よ。へボ監督はいつつも間違えるのに」

どンドン、皆が自己紹介。それと後ろで監督が崩れ落ちちやつてる。

わたしが言うのもなんだけど、これだけ同じ顔が揃ってるのに、どうしてわかったの？

「……秘密だ」

「」「ええ?」「」

でも、答えてくれなかった。

「何で?? どーして秘密?!!」

凄く気になったから、教えて欲しかったから、わたしは一番前にいた一花より前に出た。

「秘密だから応えれない。それ以上の理由があるか?」

口元をへの字にさせちやった。でもほんと何で教えてくれないのかな。

そのあと何度か聞いてみたけど、やっぱり答えてくれなかった。

秘密にするような事……なのかな。

でも、沢山話して、話せて楽しかった。

彼の名前はユースケ君だって。

相手のチームの皆から頼りにされてて、皆のお兄さんって感じだった。

あつという間に時間が経って、もう皆は帰る時間になったんだ。

「はあ。財布落ちそうになってるぞ」

「おおっとー！ えへへ。ありがとう」

それで——彼は、最後までビックリさせてくれた。

「やっぱりドジだな四葉。次落としても拾ってやらないからな。もう落とすなよ」

——やっぱりドジ。だって。

まだ あの時のお礼を言えてなくて、あの時。あの木の下でオロオロしてて、最後に木に登ろうとしてたのが 私だって まだ言っただけでなかったのに。

ユースケ君は、わたしの事だってわかってくれたんだ。

「え、えつと、その——あの、猫ちゃんの事、ありがとう」

「おう」

その日の帰り道で、私達姉妹の間の話題はユースケ君の事だけだった。

サッカーが上手だって事もそうだけど、それよりも何よりも、私達の事が判った事の話題が中心。

「ほんと凄かったよねー！ あの後も何度か こそつと入れ替わったのに見事に当てられちゃった」

「うんうん。間違えられるほど そっくりだって事は褒め言葉だけど、当ててくれるの

も何だか凄く嬉しい！」

「四葉が気になるだけはあるー」

「私も気になっちゃったもんねー。って、あれ？ 五月？ どうしたの？」

でも、何だか五月だけがちよつとだんまりだったんだ。

ずつとじゃないんだよ？ ほんのついさっきまでは、一緒に盛り上がってたから。

「お母さんが言ってたこと、思い出した」

「え？」

「ほら、私達を見分ける為には、って……」

「「「えーつと……… つ!」」」

皆、同時に思い出したみたい。だから 同時に顔真つ赤にさせちやつた。やつぱり息
ぴつたり。

だって、お母さんが こう言ってたから。

——愛さえあれば、自然とわかる。

って。

3話

「えー、今日もユースケ君来てないのー？」

「……みたいだな。と言うかサッカーしにくる理由が男か？　男が目的なのか？　四

葉。マセ過ぎてませんか？」

今日もやってきたサッカーの練習試合。

でも、そこにはあの男の子……ユースケ君は来てなかった。前回も来てなかった。自分達姉妹と一緒に　助っ人と言う事は知っていたんだけど、もうチームの大黒柱って感じだったから普通に入ってるんだと思っただけ。

取り敢えず、監督がいつてゐることは無視する方向で。

「んー……　ま、女の子のチームだし？　ユースケ君がいつも来るとは限らないじゃん」

「それもそうだったね。そもそも男子が混ざるのって結構ズルいかもだし、たまたま来てただけだったらもう難しいんじゃないかな」

一花と二乃の2人は納得してゐるみたいだけど、やっぱり自分は凄く残念な気持ち。毎週楽しみにしてゐるから。話すのが凄く楽しくて楽しくて、また話したいってすごく思つてゐるから。

そして勿論、明確な目的はある。

「えー、でも 一花も二乃も気になるって言つてたじゃん？ 五月が言つてたこと——」

そう、五月が言つてた事。

ユースケ君が私たち五つ子を見分けた理由についてだ。

ユースケ君は頑なに話してくれなかった。

でも五月が……お母さんが言つていた言葉を思い出して、皆で顔真っ赤にさせたんだ。

勿論、そんなワケないだろーって思つてる。だつて知り合つて直ぐだったし、いきなりあ、あ、愛がある〜なんてあり得ないし。

とても楽しかったのは事実なんだけど、そんな大人な感じなのはまた別だよ！

「うーん……、気になると言えばそうだけど、教えてくれないし、と言うか 最近会ってもないし……、無理じゃないかな? って思ってるかも」

「ん…… 二乃に賛成。教えないって言ってるのに無理に聞くのはどうかなと思う」
「えー、三玖もなのー?」

何だか段々と旗色が悪くなってきた気がする。

今日も結構強引に行こう、って皆誘って 納得してついてきてくれたけど…… もう来ないって言われたら……。

「四葉」

「うー……、つとと、どうしたの? 五月」

「四葉が気になるってずっと言ってたから、私聞いてきたよ。あの男の子の事」
「……ええ?」

と言うワケで、今日は私たち5人は試合に参加せず、とある場所へと向かっていった

んだ。

勿論——ユースケ君に会う為にね。

今日……晴れて本当に良かったと思う。

天気予報は微妙な線だっけって言ったけど、何とか晴れてくれた。じゃないところやっでのんびり公園のベンチに腰掛けて空を仰いだり出来ないだろうって思う。

「……………ふう」

ぐっ、とオレは身体をベンチに預けた。所々汚れてる箇所があっただけど、この公園は基本的に綺麗。でもしつかり帰る時、帰った後は手を洗う。手洗いは必ず率先して。だっけ……………。

「にいにーっ」

「にーちゃんーっ」

オレはこいつらのお兄さんだから。

お兄ちゃんは弟と妹をちゃんと守ってあげないといけないから。
幸せに、家族を幸せにしなきゃいけないから。

「どうした?？」

「ブランコいこーっ!」

「えー、ジャンブルジムだよー」

「やーっ、ブランコいくのーっ！」

行先で揉めてる2人を見て、頬が緩んでるのが判る。元氣いっぱいいな所を見ると嬉しい。頼ってくれてるのも嬉しい。こいつらの為に、出来る事なら何でもするつもりだ。

「ほらほら2人とも。順番順番。ジャンケンで決めて、両方遊ぼうな」

「わかったー！」

「うんっ!!」

ケンカしてても、次にはケロっとしてる2人。大きな動作でジャンケンしてる2人を眺めつつ、カバンの中に入ってる本を取り出して本に目を向けた。

2人のジャンケンは、順番とかを決める以外にも、ジャンケンそのものが遊びになっ
てしまうので、時間はかなりかかる。2回勝つまで、3回勝つまで、とどんどん回数
が広がって行って、目的が変わっていくんだ。

それもいつも通りなんだけど、時間がかかるので、その間様子をみつつ、本も見るの
が決まりだったりするんだ。途中まで読んでる本だから、今日は最後まで読む事になる
かな? と予想しつつ、本に目を通し始めたんだけど、ここでいつもとは違う事が起き
た。

「にいにー、にいにー」

「ん?」

まだ、ジャンケン初めて直ぐだつていうのに、妹に呼ばれたんだ。ジャンケンがスタートしたら、それが遊びになつて 10分、20分は掛かつてしまふ筈なのに。

「すごいーい! みんな同じ顔——! ルーガー戦隊みたいーっ!」

弟もはしゃいでるのが判る。

そして——何やら気になる事を言つてた。……みんな、同じ顔と。

同じ顔をしている人なんて、それも弟が好きな戦隊に例える程の多さの人達なんて彼女たちしか思い浮かばない。

あの五つ子の彼女たちしか。

「ユースケ君みつけっ!」

顔を上げてみると、予想通りだった。公園内に いつの間にかあの五つ子がやってきていたんだ。妹と弟は不思議な光景? に目を丸くしていたが、俺の名を呼んだ事で何も知らない人たちではない、と判断したんだろう。一目散に駆け出して行つてた。

「わー、おねーちゃんたちおんなじお顔——」

「すごいすごいーい！」

「えへへ。そつくりでしょ？ ふふんつ、誰が誰かわかるかな？ 因みに私は四葉つて言うんだ！」

「よつばおねーちゃん！」

「ねーちゃん!!」

そこからは、『これ、だーれだ！』ゲームが唐突に始まった。

五つ子の彼女たちは、何度も何度も入れ替わり入替り、で誰が誰でしょう！ とまあありきたりなゲームを開催してた。子供には少々難易度が高いだろう。……いや、大人でも十分に高い、高すぎる。ぱつと見同じなんだからこんな短時間で見比べるなんて無理だ。

それで、ちよつとした後四葉が俺の傍にまでやってきて隣に座った。

「あははは、すつごく元気だね？ あの子たち」

「……まあ、なんでここに？ って聞く前に礼を言うよ。2人と遊んでくれてありがとう」

「いえいえ、どーいたしまして！ 人見知りとかしないんだね？ あの子たちって」

「一応知らない人には絶対についていけない事を教えてる。四葉が俺の名を呼んだから、知らない人じゃない、って事になって 後は単純な好奇心だろうな」

五人が四人になったとしても関係なく遊んでるトコを見て、ただただ俺は笑っていた。

そんな横顔を四葉がじつと見てるのは視界の端に映ってるのでよくわかる。

「なに？」

「んーん。やっぱりわかっちゃうんだなーって思って。ユースケ君に五つ子クイズ！は無理だね。勝てる気がしないよ」

「……………」

「あ、もう無理に聞こうとかしないから、わざと間違えなくて良いよ?！」

「……………ははは。バレてるか」

「あからさま過ぎだよー」

ぐつ、と背伸びを一つした後、俺は読もうと思つてた本を仕舞つた。

「それで、どうしたんだ？ たまたまここに……………かもしれないけど、何か俺に用があったりするの？」

「んーん。ただ今日もサツカー行ってみただけど、最近ユースケ君来てなかったみたいだからさ」

「あー。ここしばらくは呼ばれても断つてて。ねえさんが病院行つてたから弟たちの面倒を優先してたんだ」

「あつ……、そう、なんだ。君もなんだね……」

「ん？ 君も？」

「うん。私たちもお母さんが入院してて、たまに帰つてきてくれるんだけど、直ぐに戻っちゃつてて……」

「……そっか」

病院があまり良い所じゃないって思うのは、きつと俺だけじゃないって思う。大切な人が入つてるとなれば尚更。お互いに元気に帰つてきてほしい事だけを願うよ。

そうこうしてる内に、三玖と一花がやってきた。妹を連れて。

「四葉さばつてちゃダメじゃん！」

「ふー、疲れた。サツカーくらい疲れたかも」

「えへへ。ごめんごめん」

四葉は、ひよいつと身体を起こして謝つてた。

俺は四葉が謝るのなら、その分 ありがとう、と言うつもりだ。この中野姉妹全員に。「三玖と一花もありがとな。唯、ちゃんとお姉ちゃんたちにお礼は言つたか?」

「うんっ! 言つたよにいに! ありがとーつて!」

それを聞いて、2人の顔を見ると 照れながら笑つていた。ちゃんと教えた事を実行できてる妹。自慢の妹だ。勿論、弟も自慢の弟。ちゃんと出来た事はしつかり褒める。

「えらいぞ。よしよし」

「えへへへ」

目を細めて笑う妹を見るとこちらも良い気分になる。

「ねえ、にいに!」

「うん?」

「にいにのおよめさんだれなのー? もてきななのー?」

テレビの影響なのか、たまに随分とマセた事を言う事が多くなつてきたのは気のせいかな? とりあえず、俺は頭をぼんぼんとやりながら首を横に振る。

「友達だよ。ともだち。唯にもいるだろう?」

「うんっ!」

納得してくれたのか、してくれてないのかはわからないけど、とりあえず俺は良しとしました。

——第三公園で弟と妹の三人で遊んでるらしいよ。

私たちは、それを聞いたから　この公園に来てみたんだ。ちよこつとだけ離れてるけど　歩いていけない距離じゃないから。遅くもならないし。今日サツカーしないし。

それで行って見たら、ユースケ君がいたんだ。聞いた通り弟と妹の3人で。楽しそうだったから、ついつい混ざっちゃった。本当に楽しかった。

それで、ユースケ君のお嫁さんな話になって、何だかドキドキしたんだ。べ、別になりたい!!とかはまだないけど、やっぱりドキドキはすると思う。女の子だしさ。

でも、私は何も言えなかった。ユースケ君の顔を見たときから、何も言えなくなっただ。

妹ちゃんの頭を撫でながら、妹ちゃんに見えないようにして、ユースケ君……、怖い顔してたから。

4話

病院は正直好きじゃない。

好きなヤツに会える所でもあるんだけど……好きになれない。出ていける保証をしてくれないから。自分の事も……大切な友達の事も。

「……大丈夫だったのですね？」

「……………」

「私に嘘はつかないで下さい。それと、私に気を使うのも同じくです。……約束した筈ですよ。これを破るのなら、貴女との友情も今日限りで終わりです」

「わかった。わかった。……検査結果は良好だよ。大丈夫だってマルオ君にも太鼓判貰ってる」

「……そう、良かったです」

自分もつと大変な癖に　こうやって私の事ばかり心配してきやがって。私がどれだけお前の事を心配しているのか判ってるのか？　このやろう！　って言つてやりたいんだが……、それが判らない訳ない。私とコイツの付き合ひは長い。伊達に長く親友やつてないんだから。

だから、もうこの手の話題は終わりだ。もう……病氣の話なんざ懲り懲りだからな。医者と向き合う時だけ思い出せば良い。零奈と一緒にいる時は……なるべく忘れる。それも約束のーつだ。

「はあ……。んでも、零奈の苦勞つてヤツ？　私にも漸く少しだけ判った気がしたよ」
「そうでした。貴女に子供が出来たんでしたね」

「まあ、な。アイツらを一人前にしてやるのが私の今の夢だ。んでもって、お前も元氣になつてこつから抜け出る。それも同じくらいでけえ夢だ」

病氣の事はなるべく止めようって思つてるのに、どうしてもそっちに結びつけたくなつてしまう。自分の事より、零奈の事の……。私が大丈夫になつたんだから、零奈だつてつて。

「……私もです。あの子達を見届けたいと思つていますよ」

「はははっ、出来るさ！　なんだつてお前のファン一号が付きつ切りで診てくれてんだぜ？　後、現代医学舐めんよ。日々進化してんだ」

「ふふ……、そうですね。貴女のおかげで私も後ろ向きな発言をいわなくなってます。……一度、彼に言っしまいましたからね。私よりも自分の時間を、と」

「はは……。ま、マルオ君がそれを了承するなんてこれっぽっちも思っただけ、言わなくなつたんなら良いさ。私も嬉しい」

今のこの病院の一室では、迷惑なんじゃないかっけくらい話し込んでる。

それが出来る様にしてきてるんだから、ほんとあの男は零奈の事が好きなんだな。ま、女の私でも惚れるけど。こんな美人だったら。

「んでもよー、聞いてくれ。心配な事もあんだよ」

「何ですか?」

「……あの子の事なんだ。子供らしくねーっていうか、早熟っていうか。まあ 確かに持つて生まれたモンがスゲエのは事実なんだが、それでも私は少しでも子供らしくして貰いたいって思っただけ、どーすりや良いのかねえ」

「……妹さんと弟さんとは」

「ああ、アイツが面倒を見てってくれるよ。零奈んトコみたいにならずと、とはいかねえけど、家族の時間を子供だつてのにスゲエ大切にしてくれてるのが判る。おかげで、兄貴にべつたりだ2人とも」

仲睦まじいのは良い事なだけだね。……でも、アイツには子供らしく子供らしくして欲しいって思うのは贅沢つてもんなのか？

「前ん時も話したけど……やっぱ心苦しいのは、アイツ……本当の親の事をちゃんと知ってて、アレも理解してるってトコなんだよな。何か まだガキの癖に そっち方面をメチャクチャ毛嫌いしててさ」

「……無責任、かもしれませんが、私は然程心配はしてませんよ」

「そーかー？ まだ早計だつてか??」

「いえ。今は貴女の——綾乃の子供なんですから。貴女が背を見せ続ければ、きつとわかってくれると私は確信してます」

齒に着せぬセリフをずばつと言ってくる所もモテる秘訣なんかね。私が男だったらマルオと取っ組み合いしてでも奪ってやってるトコだわ。

まあ、そう言われたら何となく安心できるのは、零奈が先生だからっていうのもあるのかもな。高校の先生が全員こんな感じだったら良——くもないか。怖いトコあるし。

「……何やら少々不快な事を考えてません?」

「いやいや、滅相もない。んじゃ、今後のアイツ……祐輔はわたしにかかつてるって言い
たい訳ね?」

「その通りです。……傍にいるコト。それが出来るんですから」

「勿論だ。……零奈。お前もだぞ。絶対、絶対な」

「……はい」

こうやっていつまでも話していたけれど、生憎そうはいかないんだよな。

名残惜しいケド時間つてもんがあるから。

だから、一瞬一瞬を大切にしていこう。それに零奈に言われた事は絶対に守る。

今の私に出来る事はそのくらいだ。

後は——マルオに釘さすくらいか。絶対助けてやれつて。

……助けてくれ、つて。

「にいにーまだあそびたいよー！　まだ、おねーちゃん達といっしょにいたいよー！」
「ボクもー！」

2人して、ひしつ　と五月と一花にしがみついで離れないから困ったもんだ。

もう遅くなるし、ちやんと時間を決めて遊びにいつてるんだから、心配もかけたくない。でも……妹や弟のお願いも聞いてあげたい。

一緒にいるコト以外のお願いはなかなかしないから。色々大変だった事、2人なりに判つてみたいで、あまり我儘を言わないから。

でも、……ダメなものはダメだ。

「ダメだって。ほら、お姉さん達にも予定があるんだし……」

「うう……」

「むー……」

しつかり離れない2人。その頭をそつと撫でてくれるのは五月に一花。

「また遊ぼう？ 今日はまだ終わりにして……ね？ ほら、早く帰ってご飯食べて、しつかり寝ないと大きくなれないよ？ 私達にいつまでも勝てないままだよ??」

「そうそう。私達ならいつだって遊んであげるから」

「ほんとっ?」

「ほんとー?? そつちのおねえちゃんたちもっ!」

一花や五月だけじゃない。

二乃も三玖も四葉も、皆頷いてくれた。

「じゃ、手を洗って帰る準備だね？ お片付けの準備くうよーい、どんっ!」

四葉がそういうと、きやあきやあと言いながら2人が散らかしたままになってたオモチャを箱に片付けを開始した。

本当に嬉しかった。だから、オレは礼を言う。家族に優しくしてくれる人には幾らでも。

「……ほんとありがとな。皆」

「ふふつ、大袈裟だってば。私達も楽しかったもんね?」

「うん！」

「ユースケ君の妹や弟だからやっぱり凄かったねー、凄い体力」

「私達が振り回されちゃったくらいだし……」

必至に片付ける2人を見ながら うんうんと頷く5人。息が合ってる姿を見ると、何だか面白くも思うし……、仲良さそうな所を見ると更に何だかふわふわする感覚がするんだ。言葉にするのって凄く難しいが。

「さて、また遊ぶ約束しよーよっ！ ユースケ君も混ぜて遊ぶんだからね??」

「うおっ、四葉……いきなりとびかかってこられたらビックリするって」

「くそう……、後ろからだったら、絶対にバレないって思ったのに……」

「はあ、そういうの仕掛けてくるのが二乃って事か」

「ん。たまに私もするよ」

「三玖もか……」

「ふっふっふっふっ 私達は止めといてあげよう！」

「ねー?」

「一花に五月も……。つたく、悪戯はほどほどにな」

色々と大変な姉妹と縁がまだまだ続く様だ。

いつまで続くか判らないけれど……、ずっと続いて欲しいかな。家族が笑顔になるのなら、オレは嬉しいから。

——でも……。

『……は、いらな……』

『……、のトコにい……』

『今日から……だから』

耳障りな雑音が頭の中に響く。

一言一句思い出してしまうから、無理矢理自分で別の雑音を頭の中で再生させて誤魔化してる。

それでも——顔が強張るのはなかなか止められないもんなんだ。

「……ユースケ君？」

「……ああ、なんだ？ 四葉」

「あ、いや……。何でもないよ。ほ、ほら 片付け終わったって！」

四葉が言った通り、オモチャの片づけは終わったみたいだから、オレは2人の手を取って。2人は中野姉妹の5人全員に手を振って……オレ達は公園を後にした。

四葉の視線だけが、何となく気になったけれど、次に遊ぶ約束をしてくれた事に凄く喜んでる2人を前にしたら、どうでも良くなってきたのですぐに考えるのを止めた。

家に帰るまで、油断しない様にするために。

「……………なんで、あんなにやさしいのに、時々怖い顔になっちゃうのかな……………?」